

学校経営推進費 評価報告書（最終）

1. 事業計画の概要

学校名	大阪府立枚岡樟風高等学校 全日制の課程
取り組む課題	生徒の自立支援
評価指標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 総合学科生徒の中退率の減少と卒業率の上昇 ・ 生徒向け学校教育自己診断の共生推進に関する項目の肯定感の上昇 ・ 共生推進教室生徒アンケートにおけるクラス一斉授業の理解度の上昇 ・ 共生推進教室の生徒全員の企業就労
計画名	「MOVE! 樟風 –インクルーシブ教育システム構築プロジェクト」 ～スーパー・インクルーシブ・ルームの創設～

2. 事業目標及び本年度の取組み

学校経営計画の 中期的目標	<p>(1) 共生推進教室でインクルーシブ教育を実践する 共生推進教室教育の充実を図り、共生推進教室生徒の成長を促すとともに、「ともに学び、ともに育つ」をコンセプトに学習活動や部活動、学校行事等においてインクルーシブ教育を実践する。</p> <p>※ 生徒向け学校教育自己診断の共生推進に関する肯定感の平均を毎年3ポイント以上上昇させ、平成30年度には70%以上の肯定感をめざす。</p>
事業目標	<p>(R) 本校に共生推進教室が設置されて11年になるが、その間、施設等の学習環境は全く変わっていない。そこで、総合学科の生徒と共生推進教室の生徒が一斉授業で自らを表現し、ともに高め合うインクルーシブ教育の学習環境を構築する。</p> <p>(P) 総合学科の生徒及び共生推進教室の生徒のコミュニケーション能力や社会性を高めるため、ユニバーサルデザインの「スーパー・インクルーシブ・ルーム」を創設し、学習環境を整備する。</p> <p>(D) 「スーパー・インクルーシブ・ルーム」を活用して、プレゼンテーションなど自分を表現する授業を数多く実践することで相互理解を深め、「ともに学び、ともに育つ」インクルーシブ教育を実践していく。また、教職員の特別支援教育に関する専門性の向上を図る。</p> <p>(C) 「スーパー・インクルーシブ・ルーム」を活用して、総合学科生徒の共生推進教室に関する肯定感を毎年5%ずつ上昇させるとともに、共生推進教室生徒の一斉授業における理解度を上昇させる。</p> <p>(A) 公開授業や研修等を通じて、大阪発「ともに学び、ともに育つ」インクルーシブ教育の実践を広く発信し、インクルーシブ教育の充実を図っていく。</p>
整備した 設備・物品	<p>共同学習用の机 20、椅子 40、講義卓セット、スクリーン他インフィル3面、視覚支援教材（簡易教材提示装置、個人用タブレット3台、ノートパソコン、ブルーレイプレーヤー、プロジェクター等）、聴覚支援教材（アンプ、スピーカー、マイク等）</p>
取組みの 主担・実施者	<p>教頭2名・共生推進コーディネーター</p>

本年度の 取組内容	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパー・インクルーシブ・ルームを活用した授業の実践（教科での活用） ・スーパー・インクルーシブ・ルームを活用したアクティブ・ラーニングの授業実践
成果の 検証方法 と評価指標	<ul style="list-style-type: none"> ① 総合学科生徒の中退率の減少と卒業率の上昇 ② 生徒向け学校教育自己診断の共生推進に関する項目の肯定感の上昇 ③ 共生推進教室生徒アンケートにおけるクラス一斉授業の理解度の上昇 ④ 共生推進教室の生徒全員の企業就労
自己評価	<p>※（記号説明）大きく上回った（◎）、上回った（○）、達成できず（△）、実施できず（×）</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 総合学科生徒の中退率は 1.2% ……………（◎） ② 卒業率は 84.2%（H29 は 88.8%）……………（△） ② 生徒向け学校教育自己診断の共生推進に関する項目の肯定感 は 65.9%（H29 は 62.2%）……………（○） ③ 共生推進教室生徒アンケートにおけるクラス一斉授業の理解度は 50.0%……………（△） ④ 共生推進教室の生徒全員の企業就労は 100% ……………（◎）
事業のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・スーパー・インクルーシブ・ルームを活用して、授業・HR を行った。PPT や映像教材を多用して生徒の理解を助ける授業を行った。また、生徒にもプレゼンテーションなどを積極的に行うよう指導した。 ・生徒向け学校教育自己診断の共生推進に関する項目の肯定感を 60%台に保つことができたが、目標の 70.0%を超えられなかった。3年間の共生推進教室の生徒との係りの中で生徒たちの中では同じ仲間として接することができており、自然な関係を築くことができています。今後は、生徒自身が、「ともに学び、ともに育つ」という意識を一層自覚できるような教育を行っていきたいと考えています。